

中国古典小説研究会の紹介

中里見, 敬
九州大学大学院言語文化研究院 : 助教授 : 中国文学

<https://hdl.handle.net/2324/6498>

出版情報 : 日本中国學會會報. 2001 (2), pp.8-9, 2001-12-20. 日本中国學會
バージョン :
権利関係 :



彙報

10月5日の総会における決定事項及び諸報告は次の通り。

【議決事項】

- (1) 平成12年度決算及び平成13年度予算案が承認されました。
- (2) 平成13年度事業計画が承認されました。
- (3) 次年度の大会開催校は、東北大学(平成14年10月12・13日)に決定しました。

◎会費納入について

会費未納の方には振替用紙を同封いたしますので、至急ご送金願います。なお、数年にわたった未納の方は特にご注意願います。4年にわたって滞納されますと、除名となります。(郵便振替口座：00160-9-89927)

◎『学会報』送付停止について

平成12年度会費未納の方には『学会報』を送付いたしません。会費納入が確認され次第、送付いたします。また、納入の際には、振替用紙通信欄に未送付の『学会報』号数をご記入下さい。

◎住所変更について

住所・所属機関等の変更は亟やかにご通知下さい。通知は書面もしくはFAXにてお願いいたします。電話及び会費振替用紙でのお届けはご遠慮下さい。

中国古典小説研究会の紹介

中里見 敬 (九州大学)

1986年夏、今西凱夫・西岡晴彦・大塚秀高・大木康の呼びかけによって、国内の古典小説研究者が信州大学の施設に集まり合宿を行ったのが、中国古典小説研究会の発足であった。以後、毎年夏に2泊3日の合宿（今年から大会と呼ぶ）を開くとともに、関東を中心とした例会や講演会などを通して、古典小説研究者の意見・情報交換の場となっている。また会の研究誌として『中国古典小説研究』（1995-）を年一回発行している。その前身には、大塚秀高の献身的努力により刊行されてきた『中国古典小説研究動態』（1～最終〔7〕号、1987-1994）がある。

研究会設立時の主旨として、それまで各地でバラバラに研究を行っていた古典小説研究者が一堂に会して、最新の研究情報を交換し、会員相互のネットワークを築くことが期待されていた。この15年間の活動を通して、会員数は当初の20名前後から100名を超えて、この分野の研究者の大半が参加するまでになり、自由闊達な雰囲気と相まって、当初の目的は十分に達せられている。特に合宿では、昼間の研究発表でみっちり討論した後、夜はお酒を飲みながら小説研究の話や全然関係ない話をしてたっぷり交流できるのも、この研究会のよき伝統となっている。比較的、下戸の多い研究会ではあるが、十分に盛り上がるのは、専門を同じくし気心の知れた会員同士だからであろうか。

海外の研究者や、隣接諸分野の研究者との交流も、研究会の企画者が努力してきた点である。日本に滞在中の海外研究者が、夏の合宿や例会で講演したり、質疑に加わることは珍しくないし、戯曲・中国語学・歴史学・日本文学など関心の重なる分野で活躍中の研究者をゲスト・スピーカーとして招く試みも数多く行われてきた。

古典小説研究会が組織として正式に会長や幹事を置き、

機関誌を発行するようになった1995年以後、大塚秀高・鈴木陽一・金文京が会長を歴任し、現在は岡崎由美に引き継がれている。事務局は発足時の大木康から、笹倉一広・丸山浩明、そして現在再び笹倉一広が煩雑な事務処理・連絡をこなしている。こうした関東地区の会員を中心とした情熱的な運営があればこそ、大学を超えた研究者のつながりが実現されてきたのであって、その尽力は並大抵でなかったはずである。

筆者は院生時代に第3回の合宿に参加して以来の会員であり、私なりの関心からこの15年の古典小説研究会の活動とその意義を以下に記してみたい。研究会の会員がほぼ日本国内における当該分野の専門家を網羅するために、以下の記述もいきおい日本の古典小説研究の動向を紹介するものとなることをご了解いただきたい。

1990年代以降の古典小説研究の方向を決定づけたといえるのは、井上泰山・大木康・金文京・氷上正・古屋明弘『花関索伝の研究』（汲古書院、1989）である。東西の語学・戯曲・小説研究者が共同して、説唱詞話『花関索伝』のテキストに解説・校注・資料・影印・附論・索引を施した『花関索伝の研究』は、古典小説研究会自体の研究成果ではないものの、複数の会員が参加しており、内外の専門家によってきわめて高い評価を受けていることはここで改めて言うまでもなからう。研究対象が演劇でも小説でもない語り物（説唱文芸）、しかもその存在すら知られていなかった出土資料であったことは象徴的である。そもそも花関索とは、正史『三国志』には見えない架空の人物であるが、『花関索伝』の発掘によって彼を主人公とする語り物が明代に演じられていたということ、また『三国志演義』の版本の中には花関索の登場するものがあることなどが明らかにされてきた。これ以後、古典小説研究は語り物・演劇との関係を抜きにして

論じることはできなくなったとって過言ではないし、神話・英雄叙事詩・演劇と語り物の形式（楽曲系と詩讃系）・文学や文化における中心と周縁といったテーマへと問題はひろがっていった。また、よりマイナーな『隋唐演義』、『南北宋志伝』といった講史小説の研究が盛んになったのも、これと無縁ではない。こうした潮流の中から生まれた独創的な研究のいくつか、例えば『三国志演義』版本の研究は、日本の研究レベルが国際的に群を抜き、その成果は海外の研究者からも注目されている。

その9年後に刊行された神奈川大学中国語学科編『中国通俗文芸への視座：新シノロジー・文学篇』（東方書店、1998）は、尾上兼英・大木康・鈴木陽一・金文京・大塚秀高・山口建治・岡崎由美といった当研究会の主力が結集して、『花関索伝の研究』以後のパラダイムを代表する研究論文集だといえよう。従来の小説研究・小説史と違って、語り物や演劇といった通俗文芸との関わりの中で小説をとらえようとする点に、論者の共通の関心があり、専門分野が細分化した感のある中国の研究とは一線を画す斬新な見解に満ちている。読者層の研究や社会史との関連なども含めて、古典小説研究会の10年あまりにわたる活動の成果が、ここに結実しているといつて間違いなからう。

ところで、第1回の合宿で今西凱夫は「中国の小説のどこがおもしろいのか」と、小説研究者としてのある種のコンプレックスを表明したと聞く。一方で、テレビ人形劇や漫画・ゲームなどの流行を背景に、『三国志演義』や『封神演義』を研究する学生・院生が急増するということがあった。こうした世代間ギャップを含めた小説研究の現状に対して、学界には違和感を感じる向きもないではなからう。筆者の考えでは、個々の研究者の意識は別にしても、古典小説研究会の活動は結果としてこれまでの文学観や文学研究のあり方を脱構築しつつある、少なくともそれに再考を迫っているのではないかと思う。

なるほど、今西の発言に代表されるように、中国古典小説の中に一流の文学作品といえるものがどれだけあるかという悩みは、中国古典詩文や他国文学・小説の研究に対して我々がやや肩身の狭い思いをしてきた理由の

一つであったかもしれない。それでは、近年の若手研究者がもっと「おもしろくない」講史小説や神魔・武俠小説をしきりに論じるのはなぜか。これまでの文学研究が、文学至上主義とでもいうべき価値観、実は近代国民国家やロマン主義、リアリズムといった歴史的な価値観を前提としていたのに対して、ここ10年あまりの古典小説研究はそうした価値観によって排除されてきたものの中に、広大な中国の物語世界の脈を再発見してきたのである。その対象はこれまで文学史に取り上げられることのなかった作品から、文字に書かれない口承文芸にまで広がる。言い換えると、これまでの小説研究が研究対象を一流作品に限定することによって、文学研究や文学史の制度に奉仕してきたのは、何を守るためであり、何を排除するためであったのか——このような知の制度をめぐるポスト構造主義的な問いかけを、現在の古典小説研究そのものが孕んでいるといえるのである。

思えば、中国で胡適や魯迅、日本で塩谷温や狩野直喜らが小説を含んだ「中国文学」という知の体系を創出してから一世紀、古典小説研究はいまなお文学をめぐる知のあり方にチャレンジを続けているのだといえよう。古典小説研究会における議論は謹厳な実証研究が中心であるとはいえ、そうした研究の積み重ねが持つ意味を筆者なりに考えると、大上段な嫌いがあるとはいえ、こうした一面を指摘しておくのも無意味ではないと思う。

なお、『日本中国学会五十年史』（汲古書院、1998）所収の座談会「これからの中国研究」では、金文京・岡崎由美両会員の見解が述べられている。ご参照いただきたい。

中国古典小説研究会のウェブ・ページと連絡先は以下の通り。

<http://sasa1.misc.hit-u.ac.jp/ZGXY/zgxy.htm>

ce00270@srv.cc.hit-u.ac.jp

（文中、敬称略）

「日本中國學會報」論文執筆要領

日本中國學會

応募資格

1. 日本中國學會會員に限る。

使用言語等

2. 応募原稿（以下「原稿」と略称）は和文によるものとし、未公開のものに限る。
ただし、口頭で発表しこれを初めて論文にまとめたものは未公開と見なす。

原稿枚数等

3. 原稿は校正時に加筆を要しない完全原稿とする。
4. 原稿枚数は、本文・注・圖版等をあわせて、400字詰原稿用紙55枚以内（厳守）とする。注も原稿用紙1マスに1字を納める。ワープロ使用の場合は1行20字とし、毎ページ何行かを見易い場所に明記する。
5. 圖版を必要とする場合、占有面積半ページ分を400字詰原稿用紙2枚の割合で換算する。圖版原稿は原則としてそのまま版下として使用できる鮮明なものとし、掲載希望の縦・横の寸法を明示する。

体裁・表記等

6. 原稿は縦書きを原則とする。特に必要とするものについては、論文審査委員会の議を経て、横書きを認めることがある。
7. 引用文は内容に応じて原文、譯文、書き下し文のいずれかを用いるものとする。原文の場合は該当する譯文または書き下し文を、譯文または書き下し文の場合は該当する原文を本文中または注に明示すること。ただし、一讀して疑問の生ずる餘地がないものについては、省略することを認める。中國語以外の外國語の引用もこれに準ずる。
校勘・版本研究等内容上適切と認められるものについては、原文のみ引用することを妨げない。
原文に返り點・送り假名をつけることは原則として認めない。日本漢學・日本漢文等に関する内容のもので、訓點の施し方自體を論ずる場合はこの限りではないが、加算された印刷費は執筆者の負擔とすることがある。
8. 原稿は正漢字體・常用漢字體のいずれの使用も可とするが、印刷にあたっては全文を正漢字體（舊字）に統一する。

活字は本文9ポ、括弧内は8ポを、注はすべて8ポを使用する。

特に本文括弧内を9ポにする場合および内容上特に異體字であることが必要な場合は、当該箇所明記すること。

9. 注は、各章・節ごとにつけず、通し番號を施して全文の末尾にまとめる。割注は用いないこと。

10. 中國語のローマ字表記は、執筆者の選擇にゆだねるが、同一論文中にあっては、ウェード式・漢語？音方案等何らかの統一のあることが望ましい。ただし、特殊な綴りで通用している固有名詞（例 孫逸仙 Sun Yatsen）、本人が自分の名前に使用している綴りについてはその使用も認める。

日本語のローマ字表記は、ヘボン式の使用を原則とする。

論文要旨

11. 応募時の原稿には400字5枚以内の論文要旨を添付する。
12. 掲載決定の論文については、英文タイトル及び英語または中國語による論文要旨（英語の場合タイプライター用箋・ダブルスペース2枚以内、中國語の場合800字以内）の提出を求める。要旨には譯文を添えること。

原稿提出

13. 原稿などは必ず書留により下記に郵送するものとし、毎年1月20日までの消印のあるものを有効とする。持参は認めない。

〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文會館内 日本中國學會

14. 応募の際、審査を希望する部門（哲學・思想または文學・語學）の別を原稿第1ページに朱書すること。ただし、論文の内容により、兩部門にわたる審査を希望することができる。

15. 応募時には、本文・要旨とも複寫コピーを用意し、計4部を提出する。（事故に備え、提出前にあらかじめ自家用のコピーをも作成しておくことが望ましい。）又、原稿は原則として返却しない。

校正

16. 執筆者校正は再校までとする。校正時の加筆・訂正は初校段階に限り、必要最小限のものについてのみ認める。加筆・訂正の結果加算された印刷費は、執筆者の負擔とすることがある。

抜刷

17. 掲載論文の執筆者に對しては、抜刷30部を贈呈する、抜刷の追加を希望する場合は、初校返送時に追加所要部數を連絡のこと。その分については、實費及び増加送料を本人負擔とする。

(昭和62年10月11日制定)

(平成13年5月13日修正)